

いのちみな生きらるべし

中川 皓三郎

目次

## 第一章 真実に生きたい

- 悔いなく生きることのできる道……………1
- 「宗」——生きることの依り処……………6
- 真実に生きたいという願い……………10
- 冒すべからざる人間……………14
- 本来に尊い存在であるという感覚……………18
- 何でもあるが、希望だけがない……………21
- 人が人を人として見なくなった……………24
- 大きな闇を持った「私」……………28
- 自分の思いどおりにならないと生きていることが喜べない……………33

## 第二章 いのちのつながり

- 人はひとりでは生きられない……………38
- 他者の存在なしに自分はない……………41
- 居場所がなくなると生きていけなくなる……………45
- 共に生きることのできる世界を見失う……………48

## 第三章 ご本尊・阿弥陀如来

- 真実そのものが私たちに呼びかけるすがた
- 真実に生きるものになれ……………54
- 無常の身を生きている……………58
- 本来にしたいこと……………62

■ 人間であることを失わずに生きたい	.....	67
■ いのちに目覚めて生きる	.....	69
あとがき	.....	71

## 第一章 真実に生きたい

### ■ 悔いなく生ききることのできる道

今日は、「いのちみな生きらるべし」と、こういうテーマでお話しさせていただけます。この言葉は、ドイツの詩人でありますリルケの『時禱詩集』の、

あたかも 牢獄ろうごくを逃のがるごとく

人はみな 自己の前を逃れんとすれども

世に一つの大きいなる奇蹟きせきあり

我は感ず いのちみな生きらるべし、と。

という一節の中に出ている言葉です。

私は、大学を出た後、何と申しましょうか、生きることに悩み、生きることそのことに問題を抱えまして、二十四歳の時に京都にあります大谷専修学院に入れていただきました。大谷専修学院は、真宗大谷派が直接運営する学校で、住職になる資格、教師資格と言いますけれども、一年間学び、卒業すると、そういう資格が与えられる学校であります。職員もその家族も、学生と共に寮生活をし、朝、昼、晩と三食を共同で作りながら、親鸞しんらん聖人の教えを学ぶ、全寮制の学校です。この言葉は、そのときの学院長であります信國のぶくに淳先生から教えていただいた言葉なのです。

このたびは、現代という時代を生きている生徒さんたちとの関わりの中で、おそらく、いろいろと問題を感じておられる先生方と共に、私自身が大谷専修学院というところで、それこそ、「どんなのちもみな生きることのできるいのちなんだ」と教えられたことを、生徒さんたちが抱える課題を共有しながら考えてまいりたいと思います。そしてそれと同時に、私たちが身を置き、学ぶ学校というものが、どういう学校であるのか、そのようなことを確認しながら、限られた時間ですけれども、お話しできたらと思っております。

今回の研修会の大きなテーマとして、「建学の精神の具現化を目指して」という言葉がありました。あらためて確認するまでもありませんが、私たちがお互いに身を置く学校は、「浄土真宗」、こういう言葉をもって、どんな人も、どのような人生を生きることになっても、悔いなく生

きざることのできる道を明らかにされた親鸞聖人の教えというものを建学の精神として、建てられた学校であります。そのときに、みなさん方は、「浄土真宗」という言葉で語られる親鸞聖人の教えというものを、いったいどういうものだとお感じになっておられるかということが問題となります。

私はいま、大谷大学というところに身を置いておりますけれども、現在の大谷大学は、ご存じかどうかわかりませんが、明治の時代に清沢満之<sup>きよざわまんし</sup>という先生が、京都にあった大学を東京に移して、近代の大学として親鸞聖人の教えを世界に公開していこうと、「真宗大学」を建てられたことから始まるのです。そのとき、清沢先生は、今日から新しく真宗大学が始まるという開学の式典で、「開校の辞」を述べておられます。そ

こには、「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。」という言葉があります。その場には、文部大臣とか、東京帝国大学の学長とか、当時のそうそうたる人たちが列席しておられました。そういう人たちを前にして、真宗大学は、他の学校とは異なって、宗教学校なんだということを高らかに宣言しておられるのです。

みなさん方が身を置いておられる学校も、それぞれの学校が、現代社会に捧げていく大きな使命というものを掲げておられると思います。そのことと別ということではないのですが、みなさん方の学校も、また、宗教学校であるということをはっきりと意識しなければならぬ、そういう時代に来ているのだと思います。私は、こうして衣<sup>ころも</sup>を身につけてお

りますし、そういう意味では僧侶ですけれども、たぶんここにおられる先生方の中には、僧侶でもないし、宗旨も浄土真宗でない人もおられると思います。でも、そういう方々がいろいろなご縁で、いま、親鸞聖人の教えというものを建学の精神に掲げる学校に身を置いておられるわけで、そのことの持つている意味ということもあるわけですが、先生方のおられる学校は宗教学校なんだということを、何としてでも大切なこととして確認していただかなければならないと思うのです。

### ■「宗」——生きることの依り処

現代という時代は、いろいろな宗教に関わって大きな事件があったり、世界においても、宗教に関わつての戦争があつたりして、それはいまま

続いているわけで、宗教というものが非常にうさん臭いものとして感じられています。宗教という言葉が手あかに汚れてしまつて、その本来の意味というものがわかりにくくなつてしまつています。たとえば、宗教を必要とするか、必要としないかなどと問われることもあります。実はそのように問うこと自体が意味を持たないのです。なぜなら、宗教というものは、人が生きるといふことと本質的に結びついた事柄だからです。どういふことかと言いますと、清沢先生の短い論文に「精神主義」と題されたものがあります。そこに、

吾人の世に在るや、必ず一つの完全なる立脚地なかるべからず。若し之なくして、世に処し、事を為さむとするは、恰も浮雲の上に立ちて技芸を演ぜんとするもの、如く、其の転覆を免るゝ事能はざる